

の追求に限界はない。スポーツも種目ごとに計測基準が違ふように、美にもいくつかの方向（趣味）があり、それぞれの基準が違ふ。中世の「婆娑羅」なら美麗を追求して絢爛豪華を尽くそうとする。世阿弥の「幽玄」なら上品を追求して気品ある繊細優雅を目指す。「わび教寄」なら「冷え」た美を追求して色彩を排除し、目に立つ技巧を排除し、いかにも無作為のように見せようとする。美の理念は異なっても、追求の姿勢は変わらない。適当でいいなどと言えば、スポーツと同じで、仲間からまじめにやれと非難されるだろう。しかし「出ず入らず」とは、このような追求を放棄するものである。いや、むしろ「追求」という行為そのものを意図的に避けている。ここには何か新しい美の条件が働いているのだ。それは何か。

2 「半可通」と「野暮」——「恥」の文化

ここで導入された新しい条件とは、他者の目である。このことに気がついたのは「いき」の構成要件の一つに「媚態」があることとみた九鬼周造であった。彼はそれを「二元性」と呼んだ。媚態という状態においては、「私」はつねに「あなたにとっての私」であるほかはないからだ。ひとり相撲が相撲として成立しないように、「私を見るあなた」がいなければ媚態は成立しない。九鬼は「なまめかしさ」「つやっぽさ」「色気」などもこの二元性をもつとする。これらは媚態を行う者に対して他者の視線が下す評価であるからだ。ただし「上品」はこの二元性をもたないともいう。「上品」

であるために他人の目は必要ないからだ。九鬼は「いき」をこの媚態の現れ方の一形式とみなし、したがって他人の目に依存する二元性をもつと考えたのである。

媚態の例はわかりにくいかもしれないので、別の例を考えよう。ある行為が「善」であるか「悪」であるかは、道徳的基準に照らせば機械的に決まる。他人の目は関係ない。しかしある行為が「恥ずかしい」かどうかは、他人の目によって決まる。基準はこの場合「人の目」なのだ。人目のないところで立ち小便をするのは、悪いことかもしれないが、恥ずかしいことではない。善悪は一元的だが、恥は二元的なのである。

ここで日本人論の古典『菊と刀』を思い出そう。第二次大戦中、アメリカ政府は日本兵の行動パターンを知るために文化人類学者のルース・ベネディクトに研究を依頼し、彼女は戦後その成果を公刊した。『菊と刀―日本文化の型』である。そこで彼女は西欧の文化を「罪の文化」、日本の文化を「恥の文化」と呼んだ。ここで言う「罪」は法律の問題ではなく、良心の問題である。だから裁判で無罪になるうが、他人がどう言おうが、良心に照らして自分が罪ありと思えば苦しむことになる。「罪」は当人の内面の問題なのだ。ところが日本人は他人の目によって自分の行為のよしあしを判断している。その基準は他人の目に適切と見えるかどうかである。この「恥」こそが日本人の倫理規範だというのである。九鬼風に言うなら、「罪」は一元的であり、「恥」は二元的である。罪の有無は自分で決定できるが、恥の有無は他人が決定するものであるから。

「すい」は一元的である。『好色一代男』の小紫を思い出そう。彼女の自己犠牲的行為はまったく

他人の目にわからない。助けられた十歳さえ、ただ自分がもてたと勘違いしているだけで、助けられたことに気づかない。だから恩を感じることもさえない。けれども江戸の遊廓では、かなり初めから二元的であった。つまり他者の目を意識して「体面」を重んじ「恥」をかくことを恐れていた。それは初期の丹前の「意気地」にすでに現れている。水野は自分の命よりも「男だて」としての面目を重んじたのである。中期の「いき」の時代はもはや奴風の殺伐とした文化ではないが、やはり「恥」は大きな関心事だった。

遊廓でもてるためには遊廓の慣習や遊女らの心理に通じ、頭から足下まで「いきちゃん」な装いをするのが条件だと思われていた。この条件を満たす人を「通」といい、遊びの初心者たちは「通」になるためのガイドブックを求めた。この需要にこたえて洒落本、別称「通書」が登場する。最初の洒落本といわれる『遊子方言』の第一話は「通り者」（通人のこと）が初心者の若者を連れて吉原へ行き、「いき」を指導する話である。ところが通ぶりをひけらかす「通り者」が冷たいあしらいを受け、遊廓事情には無知だが素直な若者がもててしまうという結末になる。まるで「いき」が野暮に敗北するかのようだ。じつは洒落本にはこのパターンが多い。

「通」の反対語は「野暮」である。野暮とは場のルールに無知であったり、他人に対して無神経であったり、美的センスを欠いていることをいう。ただし、前述の若者のように、無知であることを自覚し、他人から学ぼうという謙虚さがあれば、吉原はやさしく扱ってくれる。無知で嫌われるのは「田舎者」といわれる人種である。彼らは自分が無知であることを自覚せず、他人の気持ち無

視して身勝手に振る舞うからだ。けれども、野暮よりも軽蔑される者がある。なまじ多少の知識と経験があるため、自分が通人であると思ひこんだり、通ぶりをひけらかそうとして馬脚を出してしまふもの。いわゆる「半可通」である。「なま通」ともいう（「なま」は「なま兵法」のように中途半端を意味する）。そして洒落本の内容は、手本となる通人の描写よりも、半可通の言動を描いて嘲笑することに重きがおかれている。もちろん洒落本はエンターテイメントであるから、面白おかしく書こうとする。だが『東海道中膝栗毛』のような単なる滑稽な失敗談とは違ふところがある。通のつもりで一人悦にしている半可通に対し、遊女をはじめ周囲の人々が、心の中で馬鹿にしているのがわかるように書いている。つまり、いかに恥ずかしいかがわかるように書いている。その笑いは、ふつうの笑いではなく、嘲笑なのである。洒落本には、こうすればもてるという教えよりも、こうすると笑われてしまふという教訓が多いのだ。

従来「いき」の反対語は「野暮」であると言われてきた。しかし「半可通」は「野暮」よりも恥ずかしいものだった。だから江戸末期の「いき」を調べるなら、「野暮」の反対語としてだけでなく、「半可通」の反対語としても調べなくてはならない。まぎらわしいことに「半可通」もまたある意味で「野暮」とは反対のものである。ただ半可通の連中は「いき」を「上品」や「美醜」と同じく人や物の属性と考えており、「いきちゃん」な身なりや言動をすればもてると思っている。じつは「いきちゃん」とは他人から好かれることだということ、つまり「二元性」の問題だということとを知らないのである。

上方において「通」は「すい」となり、江戸では「通」は「いき」となったと前に述べた。そして上方の「すい」を調べたとき、その対極は「がち」であり、それは「山出し」を意味していた。つまり「通」の反対は無知であった。無知な人はふつう自分が無知であることを自覚しているから謙虚に学ぼうとする。そこで『色道大鏡』は「がち」が修行を積んで「すい」に到達する道（色道）を説いた。しかし江戸においては、「通」の対極は「半可通」であった。「半可通」は当人にその自覚がないので、あたかも通人のように振る舞う。ところが他人の目から見れば、それは滑稽でしかない。これほど恥ずかしいことはない。

何が恥ずかしいのか？ 知らないのに知ったかぶりをしていること。できないのにできるふりをしていること。そしてできていないのに、自分はできていると思っていること。たとえば、流行の衣裳を自慢げに見せびらかしているのに、それがすでに流行遅れであったりすること。田舎侍の代名詞となった「浅葱裏」がよい例である。浅葱色（ネギのような緑がかった青）の木綿は一時江戸で流行したが、やがて廃れた。しかし地方ではそのことが知られず武士の着物の裏などに用いられていた。参勤交代があると彼らはその姿で江戸にやってくる。そして流行遅れであるのに、自分はいけていると勘違いしているところが滑稽だというので、馬鹿にされたのである。「女にはご縁つたなき浅葱裏」という川柳は、江戸人たちの彼らへの嘲笑を示している。しかもこれは町人たちによる、武士への嘲笑である。「いき」という文化規範は、このような階級を逆転する革命を可能にしたのである。

では、恥ずかしくないふるまいとはどういうものか。右の反対を考えてみよう。知っているのに知らないふりをする。できるのにできると公言しないこと。できているのに、みせびらかさないと結い」という言葉の意味を理解することができる。

「本多」は流行の髪型である。「茶筌坊」は流行遅れの髪型である。そのどちらでもないのが「出ず入らず」である。流行遅れはもちろん恥ずかしい。だが流行に乗っていると見られるのも恥ずかしいのだ。とりわけ「本多」は派手であるから目に立つ。つまり自分は流行を知っていると誇示しているように見える。それは「出ている」ことなのである。逆に「入っている」とは、何も外に表れているものがないことである。つまり髪型に何の特徴もない、適当に結っているだけというものだろう。そういうものは「いき」ではない。おそらく志厚は本多には結わなかったが、本多を生み出した時代の美意識については鈍感でなかっただろう。そのころの時代の好みは、髪は少なく眉は細く、軽快にすっきりとつくるものだった。髪が多いものは、その重い感じを嫌われた（もともと開国以後、日本が戦争を意識し始めると、古風な大きい鬘がまず武士に、そして庶民にも流行する。それを「糞船のたわし」と呼んでいやがる人もいた）。志厚も時代に合わせて、髪のを減らすといった調整をし、垢抜けた印象の頭を作っていただろう。それは保守的な老人から若い女性まで、誰が見ても厭味のない髪型だったろう。だから「男女好いきちょうん」と言われたのである。「男女好」の反対語は、たぶん「いやみ」というのが一番近いだろう。それは自分が「いき」であることを誇

示し、他人に評価を強要する態度である。

けれどもなぜ「出ている」ことが恥ずかしいのだろうか。見せるべきでない何か、他人の目に見えてしまうからである。では何が見えるのか。それは自分をよく見せようという「作為」である。たとえば、震災の被災地に多額の寄付をしたタレントが、金額を記載した振込用紙の写真をインスタグラムに上げたところ、ネット上でいわゆる「炎上」状態となったことがある。「売名行為」だというのだ。寄付そのものは善行だが、その動機が「美德の誇示」であるともなされたのである。

一元的に道徳的基準に従うなら、いくら善を追求してもよい。美的基準に従うなら、いくら美を追求してもよい。しかし「恥の文化」においては、その行為の背後にある「作為」が問われるのである。自己顕示欲から出た善行は「偽善」と呼ばれ、相手の感謝を要求しているように見えると「恩きせがましい」と言われる。美意識の高さをあからさまに誇示すると「きざ」とか「ぶっってる」などと言われるだろうし、得意げに振る舞うと「気取ってる」とか「いやみ」などと言われる。それらは恥ずかしいことなのである。

「出ず入らず」という規範が美の追求の行き過ぎを避けること（「出ず」）、そして何の美の工夫もないのを避けること（「入らず」）であるのは、きざになったり野暮になったりする「恥」を避けるためである。ただし何も知らない野暮は大きな恥ではない。半可通にありがちな『よく見せようとする作為』が見えること」が致命的な恥なのである。ここには屈折した二重構造がある。

もともとおしゃれは自分をよく見せようとする行為である。単に「よく見せよう」とするだけな

ら、美を追求すればよい。だが「自分をよく見せようとする作為」が見えることが恥ずかしいと思った瞬間、その作為を隠すという別の次元の作為が始まる。「出ず入らず」であるためには、そのような『作為』を見せない作為」が必要なのである。それは繊細な美意識を持った人間にしかできないことであり、だからこそ『辰巳の園』はこれを深川の「いきちゃん」としたのである。ひょっとしたらその背後には、ライバル吉原の「いき」はしょせん本多鬘を好む程度の単純なものだということ思いがあったかもしれない（じつは深川は吉原を野暮と見くだしていた）。

こうして「いき」の美意識は屈折したものとなる。野暮を恥ずかしいと思えば外見や振る舞いを洗練させて「通」とならなければならぬ。しかし「通」であるところを見せようとする、今度は「通ぶってる」とか「むしろ厭味だね」とか言われる。日本には「自分をよく見せようとする」ことを「見苦しい」とみなす文化があるからだ。

なぜそれを「見苦しい」と見るのか。それは「欲望」という利己的なものが表面に出てしまっているからだ。「欲望」の抑制はいうまでもなく倫理的な要請である。ここに「いき」という美意識が倫理的な規範につながる理由がある。服装が「美しい」かどうかは美的判断の対象だが、自分の美意識が優れていることを他人に認めてもらいたいという「欲望」は倫理的判断の対象となるのだ。もちろんこれは美意識の有無だけでなく、徳性の有無についてもあてはまる。ある行為が善行か否かはもちろん倫理的判断の対象だが、善行をして自分が「いい人」であるとの評価を得ようとするとき、その欲望もまた倫理的判断の対象となる。欲望が表面に出てしまうとき、せっかくの善行

も他人の目にはかえって「見苦しい」と映るのである。ではどうすればよいのか。ここに「いき」な振る舞い方が工夫されることになる。

3 「いき」の表と裏——二重構造のしかけ

テレビでジャングルポケットという三人組がこんなコントをしていた。ある会社員の男が会議の前に悩んでいる。今日恋人が外国へ旅立とうとしている。彼は空港へ駆けつけて彼女を引き止めたのだが、勤務時間中だ。ついに彼は意を決して、上司に外出の許可を求める。厳格な上司は、部下が重要な会議を休んで女に会うことを許さない。しかしそのあと上司はこう言う。「まだ会議まで時間があるな。風邪気味なので、ちょっと寝ることにする。その間にながっても私は気づかないだろう」。すると部下はひどく心配し「すぐ布団を用意します」と布団を取りに行こうとする。上司はあわてて彼を引き止め、改めてこう言う。「腹が減ってきた。私の好きな弁当が空港にあるので、今すぐ空港へ行って買ってきてくれないか」。すると部下は怒り出す。「私が彼女に会いに空港へ行くのはだめなのに、自分の好きな弁当は買いに行かせるんですか！」観客は爆笑した。コントのタイトルは『伝わらない』。上司の真意は、部下に恋人のもとへ行かせることにある。ただしそれは言葉の上には表われず、言外の意味として示唆されている。部下は言葉の表面だけを、まさに文字通りに取ってしまう。その結果、部下思いの上司がまるで悪い上司になってしまったことに